

子どもの遊びを活性化させるための 素材庫（アトリエ）の可能性

植草 一世^[1], 安藤 則夫^[2], 馬場 彩果^[3], 谷 信子^[4],
鈴木 朱美^[5], 尾形 光穂^[6], 栗原ひとみ^[7], 広瀬 由紀^[8]

[1]植草学園大学発達教育学部・幼保連携型認定こども園植草学園大学弁天こども園, [2]植草学園大学発達教育学部, [3]植草学園大学発達教育学部, [4]幼保連携型認定こども園植草学園大学弁天こども園, [5]幼保連携型認定こども園植草学園大学弁天こども園, [6]幼保連携型認定こども園植草学園大学弁天こども園, [7]植草学園大学発達教育学部, [8]植草学園大学発達教育学部,

街ぐるみで子どものための素材活用を実践的に研究しているレッジョ・エミリアを参考にして, 近年, 保育現場で素材庫（アトリエ）作りを行ってきた。これからの保育の方向性を見いだすために, 保育者志望の「学生」と「素材庫作り未経験保育者」と「経験保育者」の素材庫（アトリエ）に対する意識調査を行った。「学生」は, 子どもの視点に立ち, 楽しく使いやすい素材庫（アトリエ）を考えた。「素材庫作り未経験保育者」の回答では, 子どもの想像力, 発想力の育ちに繋がるという肯定的意見と共に, 素材を使う上での気がかりな点や注意点が多くあがった。「経験保育者」は, 素材庫（アトリエ）を活用した幼児との遊びの経験に基づいて, 遊びの活性化や子どもの繋がりの可能性を見いだした。その時のエピソードの記録を学生に示すことで, 学生は子ども達の遊ぶ姿に喜びを感じることができた。大学附属認定こども園と大学の素材を通じた協力・連携の可能性が見えてきた。

キーワード：素材庫（アトリエ）、レッジョ・エミリア、大学附属認定こども園、意識調査、遊びの活性化、

1. はじめに

1.1 子どものための素材

本研究者は, 保育現場において子どものための素材研究を行ってきた¹⁾。幼稚園教育要領²⁾や保育所保育指針³⁾の第1章総則が示すように, 保育は環境を通して行うものであるとすれば, 素材が身近にあるということは, 子どもが健やかに育つための環境となると言える。保育の場に, 多くの素材（本研究では, 造形活動の素材）があることは, 子ども達の環境が豊かになることを意味する。子どもは, 「豊富な素材」に囲まれることで, 自分の活動のためのインスピレーションを得られることになるであ

ろう。保育場面では, 子どもの個性に合った, 子どもが扱える様々な素材が必要となる。

1.2 幼保連携型認定こども園植草学園大学附属弁天こども園

まず, 幼保連携型認定こども園植草学園大学附属弁天こども園（以下, 弁天こども園と記す）の概要を述べる。

学校法人植草学園は, 2009年に植草学園弁天保育園を開設して以来, 既存の植草学園大学附属弁天幼稚園と幼保一体化を目指してきたが, 2016年4月に, 幼保連携型認定こども園植草学園大学附属弁天こども園をスタートさせた。弁天こども園の目指すところ

ろは、植草学園の建学の精神（徳育教育＝こころの教育）であるところの自分を尊重し、人へのやさしさや思いやりを重視することにある。



写真1 植草学園大学附属弁天こども園

弁天こども園は、建学の精神を根幹としてインクルーシブ保育を目指している。それは、障害のある子、気になる子、外国籍を持ち言葉や文化の違いがある子たちを含めた保育である。また、親の就労状況にかかわらず、就学前の子ども達が安心して過ごせる場、様々な遊びを通して共に成長し合える場になる保育である。その具体的方法等を保育者間で話し合い、保育を進めているが、幼稚園や保育園の既存のやり方だけでは、円滑な保育が出来ないことが分かってきた。そこで考えられたのが素材庫を作ることであった。弁天こども園での今回の取り組みが、これからの保育の方向性を見いだせればと考えている。

1.2.1 未満児クラスの保育の経過と課題

未満児クラスは、0歳児（13名〔0歳児9名、1歳児4名、担任4名〕）、1歳児（14名・担任3名）、2才児（18名・担任4名）の編成である（各クラス補助で1名ずつ加配）。一人ひとりの子どもの発達・特性・生活リズムを踏まえ、食事・睡眠・排泄をゆるやかな担当制で行っている。日常の保育の中で子ども達の喜びや、悲しみ、淋しさ、怒り等の感情を保育者がしっかり受け止め、温かみのある応答的な関わりをすることで、愛着を形成し、自己肯定感、人への信頼感を育む保育である。保育室の環境は、①子ども自らが、環境に主体的に関わり、自発的な活動ができること、②室内で落ち着いて遊べること、③子どもの発達、興味に適したコーナーを整え

ること、の3点を重点に置いている。しかし、現状の子ども姿をみると、室内を走り回り、玩具を散らかす等、落ち着かない姿がみられる。保育者との関係だけでなく、子どもにとって「魅力的であり、自発的に遊べる、また発達に適した環境」についての見直しが課題となっている。

1.2.2 幼児クラスの保育の経過と課題

幼児クラスは、3歳児クラス（30名）、4歳児（35名）と5歳児（35名）に、縦割り2クラス（担任各2名）、合計3クラスの編成である。1号認定児と2号認定児の混合クラスである上に要支援児の在籍もあるので、非常勤職員10名を配置している。幼稚園時代とは違う、親の様々な就労等の状況に対応した短時間・長時間保育を導入し、様々な個性のある子ども達を受け入れるために、遊びや生活といった環境の見直しを行った。保育室が子どもの落ち着きの場となるように、遊びと生活の場の配置や設定を模索し、限られたスペースの中で遊びと生活の場が共有出来るように、保育環境の整備を行っているが、子ども自身が生活出来る場を設定することで、子どもの主体性が確保されるよう考えている。そのために玩具や遊具や生活用品を子ども自身が自分で取り出し、使い、元の場所へ片付けられるようになる必要がある。しかし、保育室のスペースには限りがあるので、子ども達の遊びに必要な素材を保育室内だけに置けないという問題が浮上してきた。具体的に素材の配置をどのようにしたら良いのかさらに保育者間で話し合われた。

2. 基礎研究

2.1 創造的リサイクルセンター（イタリア レッジョ・エミリア、レミダ [REMIDA]）の取り組みから

研究代表者（植草）は、イタリアのレッジョ・エミリア市の視察研修（千葉市民間保育園協会主催2014年11月）に参加した。そこでは、レッジョ・エミリア・アプローチと呼ばれる子どもの個性や創造性を重視した保育が行われている。その保育を中心的に支えているのが「レミダ」という「創造的素材リサイクルセンター」である。その街ぐるみの素材収集活動に感銘を受けた。さらに、レッジョ・エミ

リア文献・著書⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾に出合い、子どもの表現活動を支える素材の役割や可能性について大きな示唆を得た。教育とアートを融合させたレッジョ・エミリアの実践では、アトリエリスタ（美術専門家）とペダゴジスタ（教育専門家）という専門職を配置している。我々の保育の中で実践する上では、保育者が兼務することになる。アトリエリスタ（美術専門家）のような芸術的な指導は及ばないながらも、保育者が子どもの表現活動を支える素材を保育の教材研究として行うことでスタートさせることにした。

2.2 素材庫（アトリエ）を作った幼稚園の取り組み

空き部屋やコーナー等を利用して「素材の部屋」（以下、素材庫（アトリエ）と記す）を作った、植草学園大学附属美浜幼稚園の概要を述べる。

素材庫作りを経験してきた保育者たちは、2015年から素材研究を行ってきた⁹⁾。様々な発達段階にある個性を持った子ども達が「自発的に取り組める遊び」を行える方法を考えた。その結果「多様な素材が活用できる環境作り」をすることにした。つまり、様々な素材で満たし、充実させることで、どの子も何かの遊びには興味が持てるようになり主体的に遊べるだろうと考えたのである。素材庫（アトリエ）は、子ども達が自由に素材に触れ、遊びに活用できるように1階の真ん中の部屋をあてることにした。保育者が棚を準備し、紙や牛乳パックの空き箱やビーズ等を棚に整理することから始めた。保護者の協力を得て素材が集まるようになった。集まったタイルで、子ども達が「あとリエ」の看板（写真1）を作った。子ども達にとってアトリエはますます親密さを増し、活用されるようになっていった。



写真1 「アトリエ」とタイルの看板（園児）

3. 目的

素材庫（アトリエ）の可能性を検証するために、「学生」と「素材庫作り未経験保育者」と「経験保育者」の素材に対する意識調査を行った。この意識調査に基づいて、子どもの遊びを活性化させる上での素材庫（アトリエ）の役割や効果を明らかにする。

4. 方法

4.1 アトリエの役割に関するアンケート調査

4.1.1 対象と調査場所

- ① 学生グループ1年生84名（植草学園大学、授業「保育の表現技術」受講生、保育の学びをスタートしたばかりの保育者志望学生グループ）
- ② 未経験保育者グループ32名（弁天こども園）
- ③ 経験保育者グループ11名（美浜幼稚園）

4.1.2 調査期間

2016年4月～8月

4.1.3 調査の方法

アンケート調査によるデータ収集。設問1～5は4択法、設問6, 7, 8, 9は自由筆記（9は経験保育者のみ）。学生はその場で回収。保育者は、期日を設定し、回収場所を指定。4択法（「強くそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「思わない」）、回収率は100%。

4.1.4 アンケートの内容

設問1：遊びの素材は、子どもが遊ぶために必要である。設問2：さまざまな素材があると、子どもの遊びのきっかけが出来る。設問3：さまざまな素材があると、子どもの発想が良くなる。設問4：さまざまな素材は、今、行っている遊びが広がる可能性につながる。設問5：保育室以外に素材庫（アトリエ）や絵本コーナーが必要である。設問6：問1について、その理由を具体的に書いてください。素材の果たす役割、果たさない役割についても書いてください。設問7：素材庫（アトリエ）にどのような素材があったら、魅力的な素材庫（アトリエ）になるとお考えですか。設問8：素材庫（アトリエ）の具体的な配置やイメージ、アイデアがありました

ら書いてください。設問9：素材庫（アトリエ）のエピソード記録を書いてください。

5. 結果

5.1 学生グループの意識

5.1.1 遊びの素材は、子どもが遊ぶために必要であるか（選択回答の設問1～5）

設問1と設問2は同一の数値が得られた。「強くそう思う」を選択したのはそれぞれ67.9%で、「そう思う」は28.6%、「あまり思わない」は1.2%、「思わない」は2.4%であった。設問3は「強くそう思う」が59.5%、「そう思う」が34.5%、「あまり思わない」と「思わない」が各2.4%、無回答が1.2%であった。設問4は「強くそう思う」が52.4%、「そう思う」が42.9%、「あまり思わない」と「思わない」が各2.4%であった。設問5は「強くそう思う」が34.5%、「そう思う」が54.8%、「あまり思わない」が7.1%、「思わない」が2.4%、無回答が1.2%であった。ほとんどの学生が子どもの遊びのために素材が必要と考えていることがわかった（図1）。

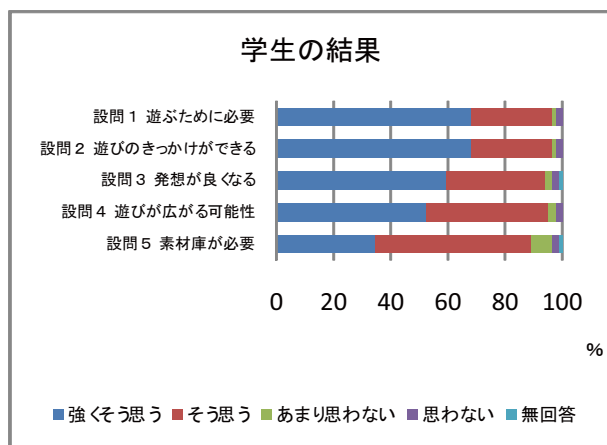


図1 保育の素材アンケート（学生）結果

5.1.2 その理由（自由筆記，設問6）

自由筆記では、「素材を組み合わせることで遊ぶなど、発想を広げることができる」、「想像力が掻き立てられ、新しい遊びに発展する」、「使い方や遊び方を考える力がつく」など、素材は子ども達の想像力や発想力を豊かにし、遊びを作り出したり表現したりする力が培われるといった内容が最も多くあった。次に多かったのは、素材を通してコミュニケーション

が生まれたり、友だちと協力して遊んだりすることができるという回答であった。「周りの子とのコミュニケーションをとることができる」、「新しい友だちができたり、友だちと協力したりすることができる」、「人の意見を聞くことができる」などの記述があった。その他にも、「ものの質感や大きさ、重さを知ることができる」、「指の細かい動きができたり、感触を覚えたりすることができる」、「素材を使って遊ぶことでルールや危ないことを覚えていく」など、素材そのものから発見や学びがあり、遊びのルールを身につけられるという回答もあった。少数意見として、「さまざまな素材に触れて考えることで、心が豊かになる」、「感情が豊かになる」など心の育みや、「子どもが遊ぶ意欲が出ると思う」、「子どもが自らすすんで遊ぶという意欲につながる」など、素材によって意欲的に遊べるという回答がみられた。

5.1.3 素材が果たさない役割（設問6）

素材が果たさない役割としては、「用途が限られてしまう場合がある」、「素材の数が少ないと、偏った遊びしかできなくなる」、「たくさん与えすぎると、自分の好きなものだけに偏って遊びに発展がなくなってしまうかもしれない」、「素材の取り合いになってけんかが起きるかもしれない」、「大人が助言しないと大人で遊ぶのは難しいと思う」などの意見である。これらをまとめると、素材が遊びにまったく必要ないということではなく、種類や数、使い方など提供の仕方を工夫することで活用できるという考えのようであった。

5.1.4 どのような素材があったら、魅力的な素材庫（アトリエ）になると思うか（設問7）

最も多かったのは画用紙や折り紙、クレヨン、粘土など子どもの日常的な活動に関わるものであった。ダンボールや牛乳パック、お菓子やティッシュの空き箱、ペットボトル、新聞紙などを再利用するという意見も多かった。その他、わた、毛糸、フェルトなど手芸用品や、木の枝、木の葉、どんぐりなど自然のもの、絵本、紙芝居、おもまごと道具、人形、おもちゃ、遊具など既製品も挙げられた。具体物以外の記述もあった。「様々な感触のもの」、「大きいもの小さいもの」、「昔のもの」、「普段身の回りにあまりないもの」、「カラフルなもの」、「音が出る

もの」, 「何かはわからないけど, 子どもにとっておもしろそうな目がいくもの」, 「立体的な素材」, 「見たときにわくわくするようなもの」, 「みんなの欲しい素材がすべて集まっている素材庫 (アトリエ)」, 「何通りもの使い方があるもの」などで, 無回答もあることから, 大まかなイメージはあるものの, 具体的には考えが及んでいない学生も少なくないといえる。

5.1.5 素材庫 (アトリエの具体的な配置やイメージ, アイディア (設問8))

無回答がさらに多く, 回答があったのは全体の約3割の26名であった。配置や素材を具体的に図示したのは5名で, 素材の種類や大きさに分けて配置し, 子どもが手に取りやすい工夫をしたり, 作品を置く場所を設けたりするアイディアがあった。その他, 素材を入れた箱に名前やイラストをつける, よく使うものは取りやすい場所に, 引き出しや壁を活用する, 色分けする, 視覚的なものと身体を使うものでコーナーを分ける, 男の子と女の子が分かれてしまわないように共通で好きそうなものを置く, 同じ場所に返してもらう「おやくそく」の紙を貼る, 子どもの手が届くよう低い位置に置くなどの回答があった。

5.2 未経験保育者グループの意識

5.2.1 遊びの素材は, 子どもが遊ぶために必要であるか (選択回答の設問1～5)

設問1で「強くそう思う」と回答したのは全体の43.8%で, 「そう思う」と回答したのは50.0%, 「あまり思わない」は6.3%, 「思わない」は0.0%であった。設問2は「強くそう思う」が31.3%, 「そう思う」が65.6%, 「あまり思わない」が3.1%, 「思わない」が0.0%であった。設問3は「強くそう思う」が37.5%, 「そう思う」が50.0%, 「あまり思わない」が12.5%, 「思わない」が0.0%であった。設問4は「強くそう思う」が28.1%, 「そう思う」が68.8%, 「あまり思わない」が3.1%, 「思わない」が0.0%であった。設問5は「強くそう思う」が40.6%, 「そう思う」が43.8%, 「あまり思わない」が12.5%, 「思わない」が3.1%であった。大半が「強くそう思う」と「そう思う」を選択する結果となった (図2)。

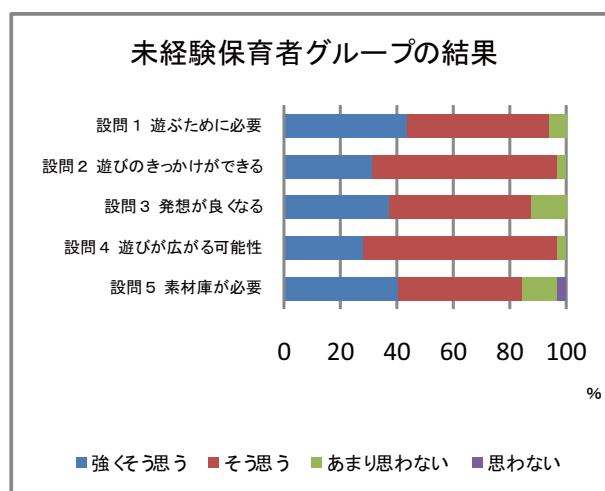


図2 保育の素材アンケート (未経験保育者) 結果

5.2.2 その理由 (自由筆記の設問6)

素材に対する考えで最も多かったのは, 子どもの想像力, 発想力の育ちにつながり, 工夫して遊ぶことができるというものだった。また, じっくり取り組むことで創造力や模倣力, 努力, 忍耐, 完成の喜びなど心の涵養が図れ, 友だちとの協力や友だちからの刺激, イメージの共有により協調性が育まれたりするとの意見も多かった。その他, 「材質, 手触り, 五感, 音で子どもは魅了され, 必要な物を考えながら選んでいく」や, 「目で見えることにより, 形や色を捉えたり, 手で触ることで柔らかさや固さを知ったり, 鼻でにおいをかいだり, と様々な体験をすることができる」, 「素材の特性などを理解し, 何をどのように使ったらよいかと自分なりに考えて取り組む」などの記述があり, 子ども達が素材を全身で感じ, 学びとりながら遊ぶことが重要であるという認識が示された。

5.2.3 素材が果たさない役割 (設問6)

設問1から5で「思わない」や「あまり思わない」を選択した保育者もいた。素材を使ううえでの気付きや注意点は, 「素材を使って形にする力を付けてからの方が良い」や「保育者の力も必要である。あれば良いというわけではなく, 量, 出すタイミングも考えていく」, 「年齢により素材は変わるので, 必ずしも必要とは言いきれない」, 「遊びを広げるためには必要だが, 仲間, 保育者とのかわりも必要。素材は遊びのきっかけにはなるが, そのためにはまず友だちや大人との信頼関係や安心感を

築くことも必要」,「素材があることで、想像し、自由に作ることができるが、あふれすぎると考えが浮かばなくなる」,「乳児は人（大人）との関わりが第一と考えるので、絶対に必要ではないと思う」,「園で一生懸命作ったものが、家庭ではゴミのように扱われることがある。保育者の伝える力や家族の協力が大きく影響する」などである。

5.2.4 どのような素材があったら、魅力的な素材庫（アトリエ）になると思うか（設問7）

特徴的な回答は、「この園、この地域ならではの手に入るもの」,「イメージしやすいもの」,「ねらいや意味のあるもの」,「自由に使ってよい量を出す」などであった。どんな子にも取りかかりやすく、素材を通して多くの気づきをしてほしいという保育者の願いが表れているようである。具体的には、牛乳パックやティッシュの箱、ペットボトルなどの廃材や、どんぐり、貝殻など季節のもの、紙、ひも、布、フェルト、モール、輪ゴム、ストロー、カラーポリ袋、ビニール袋、書くもの、接着するもの、切るもの、年長児向けに釘やとんかち、のこぎり、ペンキなど木工遊び道具等々、多岐に渡る素材の提案があった。

5.2.5 素材庫（アトリエ）の具体的な配置やイメージ、アイデア（設問8）

素材や色ごとに分けて配置し、写真を貼って中身がわかるようにするなど、子どもが出し入れしやすく一人で片付けられる工夫をするという回答が最も多かった。素材庫（アトリエ）の管理の面から、入っているもののリストを作り、補充もしやすくするという回答もあった。素材の置き場所だけでなく、取り出しやすいよう通路を広くするとか、作業テーブルを設けるとか、大きいものも作れる広いスペースを確保するなど、具体的な子どもの動きを想像した回答も目立った。また、園舎の素材庫（アトリエ）の位置にも着目した、「園庭とアトリエがすぐに行き来できると遊びが広がり、必要な物をすぐに準備できて良い」という意見もみられた。

5.3 経験保育者グループの意識

5.3.1 遊びの素材は、子どもが遊ぶために必要であるか（選択回答の設問1～5）

設問1において「強くそう思う」を選択したのは

全体の72.7%で、「そう思う」は27.3%、「あまり思わない」と「思わない」は各0.0%であった。設問2は「強くそう思う」が63.6%、「そう思う」が36.4%、「あまり思わない」と「思わない」は各0.0%であった。設問3は「強くそう思う」が72.7%、「そう思う」が27.3%、「あまり思わない」と「思わない」は各0.0%であった。設問4は「強くそう思う」が54.5%、「そう思う」が45.5%、「あまり思わない」と「思わない」は各0.0%であった。設問5は「強くそう思う」が54.5%、「そう思う」が36.4%、「あまり思わない」は9.1%、「思わない」は0.0%であった（図3）。設問5で「あまり思わない」を選択した1名は、すでに素材庫（アトリエ）や絵本コーナーがあるため「あまり思わない」を選択したという。

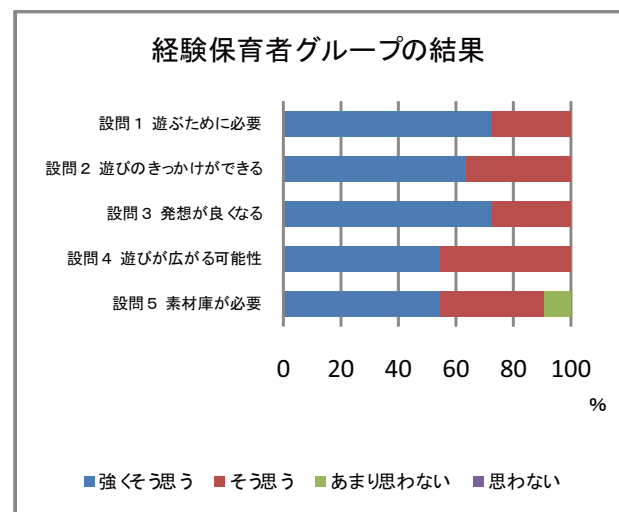


図3 保育の素材アンケート（経験保育者）結果

5.3.2 その理由（自由筆記の設問6）

回答を分類し最も多かったのは、「一つの素材を切ったり貼ったりすることで違う形に変わり、想像力や展開力が培われると思います」や、「素材を扱うことにより、創意工夫がなされ遊びに必要なものを作ったり、継続して遊びを楽しんだりすることができます」などの回答を始めた。素材により子どもの想像力や発想力、展開力が育まれ、遊びに創意工夫がなされるという内容であった。次に、素材があることで遊びのきっかけができ、遊びの幅が広がっていくという回答が続いた。また、「素材を前にして、扱い方を考えるのに時間がかかる子どもも

たくさんいると思いますが、それを保育者が(子どもに)伝えていけたらよいなと思います」や、「使い捨てのこの時代、物の大切さを伝えることがとても必要になってきます」など、素材を提供するうえでの保育者の役割を記述した回答もみられた。反対に、素材の果たさない役割については、「素材が多すぎると一つのものにかかる時間が短くなりガラタとなってしまふ」、「子どもがいつでも使える環境にしないと意味がない」、「無駄に置かれたり乱雑に置かれたりする素材は魅力を感じない」など、素材の種類や数や配置の仕方について注意が必要と記述された。

5.3.3 どのような素材があったら、魅力的な素材庫(アトリエ)になると思うか(設問7)

魅力的な素材庫(アトリエ)になるための素材は、身近なものがよいとの考えが最も多くあった。画用紙やペン、テープ類、はさみやのりなどの文房具や、空き箱やペーパー芯、牛乳パック、ダンボールや割りばしなどである。その理由としては、あまりお金をかけないこと、家庭から持ち寄れて、普段から使い慣れている素材で家でも作ってみようという気持ちにつながり、園と家庭で遊びを継続して楽しむことができることなど、学生にはみられなかった保育者ならではの考えが挙げられた。また、子ども達の様子によっては目新しいものを提供すると、より遊びが広がるきっかけになり、素材庫(アトリエ)に関心をもつ子が増えたりするとの意見もあった。ビーズ、ボタン、フェルト、マカロニ、モール、磁石、毛糸、スパンコール、粘土などである。少数意見として、どんぐりや松ぼっくりなどの自然物の他、子どもがはさみで切った紙の切れ端もごみにするのではなく、素材として置いておくとよいといった内容がみられた。

5.3.4 素材庫(アトリエ)の具体的な配置やイメージ、アイデア(設問8)

約半数の保育者から、片付けしやすい素材庫(アトリエ)にするために、同じ素材で区分したり、イラストなど表示をつけた収納箱を用意したりするといった回答があった。また、小さいほうきやちりとりがあると子ども達が楽しく片付けができるという意見もあった。取りやすく、すぐに作り出せる配置や動線が大切であるという回答が2番目に多かつ

た。同じ素材で区分するという意見もあるが、「子どもは宝探しや、思わず発見することを楽しさや喜びを感じることもあるので、色々な素材がごちゃ混ぜに入っている大きなBOXがあったらわくわくするのではないか」という、素材を見つけるおもしろさ、素材との出会い方に着目したアイデアもあった。その他、ルールのある空間であること、素材を一人占めせずたくさんのお友だちで使うこと、子どもの作品を壁に飾ることなどの記述もあり、総じて、素材庫(アトリエ)を日常的に使うことを想定した具体的なアイデアが挙げられた。

5.3.5 自由筆記のエピソード記録(設問9)

経験者のみに求めた自由筆記には、素材庫(アトリエ)を中心とした保育の経過や保育者一人ひとりが、子どもに向ける視線が記述されていた。一例のみであるが取り上げる。

平成28年6月、雨が降っていたので、子ども達は、それぞれ室内で遊び場を見つけて遊んでいた。素材庫(アトリエ)にも子ども達の遊ぶ姿があった。年中女児3人が、ペンやクレヨンを使い、カップケーキの塗り絵を始めていた。味の違いを色で表現して楽しんでいた。そのうち近くで紙スプーンを使って飛行機を作っている男児に紙スプーンを1つもらい、食べる真似をし始めたところ、お皿が必要なことに気づき素材を見渡して、「プリンカップがいい」と選んだ。しかし紙のケーキをどうのせるか考え悩んでいたため、保育者がテープで中から貼り付ける方法があることを伝えると、器用に貼り付けた。周りにいた子も興味を示して皆で考えながら作り、しばらくすると立体的なケーキができた。帰る時間となり、「明日も作ろう」と約束をする姿があった。次の日、保育者は、素材庫(アトリエ)にケーキの塗り絵の種類を増やしておいた。早速、女児3人は、昨日の続きを始めることになった。その遊びに気づいた他児も参加して、様々なケーキができていった。ケーキをトレーに乗せ運ぶ子ども達は、ポリ袋で作った赤い服を着てイチゴのケーキ屋さんに変身していった。しばらく売り歩くと「次はジュースも一緒に」と、ヤクルト容器にストローを差して各保育室に売りに出かけ、遊びが広がっていった。2日経ち、年少児も次々に中に入ってきて一緒に売ることを楽しんだ。「アトリエにお店を作

りたい」と机や椅子を並べ、ケーキ屋さんを作った。年長児がお店作り始め、「看板を作った方がいい」と画用紙に「けーきや」と書いた。近くで別の遊びをしていた子が買ってくれたが、あまり売れず、訪問販売の方が売れることに気づいたのか、各保育室に売りに行った。

年中児が作り始めたケーキを、年長児が店作りを一緒にしてお店屋さんごっこが始まった。ケーキを年少児が年中児と一緒に売ったりする姿が見られた。

6. 考察とまとめ

6.1 三者の比較

学生グループは、アイデア数は少ないものの、子どもの視点に立ち、楽しく使いやすい素材庫（アトリエ）ができるよう考えを巡らせていることがわかった。保育の中での素材は具体的イメージが乏しいものの、素材そのものの力を通して、コミュニケーションが生まれ、友だちと協力して遊んだりすることができること、素材そのものから発見や学びがあり、遊びのルールを身につけられるという考えに至っている。

未経験保育者グループは、素材庫（アトリエ）は、子どもの想像力、発想力の育ちにつながり、工夫して遊ぶことができるのではないかという記述があった。また、じっくり取り組むことで創造力や模倣力、努力、忍耐、完成の喜びなど心の涵養が図れること。友だちとの協力や友だちからの刺激が期待でき、イメージの共有により協調性が育まれることが期待されている。素材庫（アトリエ）は、子ども達が日常的に素材を活用でき、遊びの広がりが期待されている。しかし、肯定的意見と共に、素材を使う上での気がかりな点や注意点は、学生や経験保育者グループよりも多くあがった。経験していないための不安の表れとみることができる。素材は適切な選定が重要であり、素材遊びが充実するためには保育者や友だちとのよい関係づくりが必要と考える保育者が多いようである。幅広い年齢の子どもが在籍することも園らしい結果ともとらえることができる。

経験保育者グループの回答からは、学生とは異なる

り、毎日現場に立つ保育者らしい特徴がみられた。保育者は素材庫（アトリエ）を素材が多くある場として重要視しているが、子どもが片付け・整理をしやすいという視点も持っている。それは、子どもが素材を取りやすい、選びやすいことにつながる。

一方、素材との出会い方に着目した意見として、「色々な素材がごちゃ混ぜに入っている大きなBOX」等、整理整頓を目指すのではなく、子どもが自分で素材を発見できる楽しさや喜びを感じるような工夫が述べられていた。経験グループならではのアイデアと言えるであろう。その他、ルールのある空間であること、素材を一人占めせずたくさんのお友だちと使うこと、子どもの作品を壁に飾ることなどの記述もあり、総じて、素材庫（アトリエ）を日常的に使うことを想定した具体的なアイデアが挙げられた。また、経験したことで、子どもへの信頼が書かれていると言えるだろう。エピソード記録からは、「保育者も意識して素材を用意しておくことで遊びが深まることを実感した。最初は年中児が作り始めたが、年長児が手伝ってくれたり、できたものを年少児と一緒に売り、子ども達が作ったコーナーの中で自然に異年齢が関われ、遊びが共有できたことを感じた。」と、具体的事例として記述されたことは、成果として認められるであろう。

エピソード記録は、子どもの素材庫（アトリエ）活用の確認や、保育の振り返り、また保育者間の共通理解として有益な方法であった。

6.2 素材庫（アトリエ）の可能性

アンケートを取ることで、素材庫（アトリエ）の可能性について、様々な視点が得られた。素材によって「発想が生み出される」という、個々に対しての視点、子ども達がイメージを共有され、子ども達の活動につながりを持ち始めるのではないかという視点、素材に対して、子ども達の受け止め方が違うので、保育者は子ども達に何が必要なのかそのニーズを考えることとなる、という視点である。それは素材庫（アトリエ）が子どもによって変化し発展できるという可能性を示している。経験保育者が語るエピソード記録は、保育者が一方的にアトリエを作るのではなく、子どものニーズを良くとらえて子どもと共に作るという視点が示されていて、子ど

もの遊びに対して有効であることがわかる。

素材庫（アトリエ）の素材の種類や素材活用庫活用や方法にはいろいろな仕方があり、子どもに合わせながら取り組む必要がある。素材を活用した保育は、子ども自身が自分なりの遊びが見つけれ、どの子ども生き生きできる。

一人ひとり、どの子ども主体的にその子らしく生き生きと園生活を送れることが大切であるとする、素材庫（アトリエ）は、どの子ども自発的に遊べる環境となる。子どもは自分の好きなこと、得意なこと、認め合うことで繋がることができ、それは、さまざまな個性を持った子どもを含むインクルーシブ保育が目指す姿であると言える。

6.3 弁天こども園の素材庫（アトリエ）作り

弁天こども園の素材庫（アトリエ）作りは、今回の調査の後に開始された。「1.2 幼保連携型認定こども園植草学園大学附属弁天こども園」で述べたように、保育室には広さ等の限りがあるので、職員室を移動して素材庫（アトリエ）にした。移動作業は短大の学生の協力もあり、保育と平行してみんなでやり遂げることができた。子どもと共に作る素材庫（アトリエ）と言える。そして徐々にではあるが子どもが使い始めている。課題や問題点等、これから明らかになっていくであろう。このことは、次の研究で報告したい。

6.4 大学や地域との関わりやそのあり方

保育現場での、このような素材庫（アトリエ）作りを学生に伝え、学生も素材集めをして玩具を作っている。例えば、素材（牛乳パック）でキッチンセットを作り、次にそのキッチンセットで木の実や葉を使って子どもが喜んで遊ぶ（写真2）。その子



写真2 牛乳パックで作ったキッチンセット（学生と子ども）

ども達の喜んで遊ぶ姿を見て学生が、子どものために自発的にイメージ出来ることになれば、学生自ら考え活動するアクティブ・ラーニングとなる。

素材集めと整理（写真3）することは、学生だけでなく、地域の人にも協力を呼びかけることで、大学、地域の素材を通じた協力・連携が出来ていくだろう。子どもの喜びを分かち合ってもらえれば、それは今後、素材活用プロジェクト（図4）¹⁾⁹⁾となる可能性がある。具体的な行動や流れを作り出す方法を明らかにしていく必要があるだろう。その活動は、素材集めや素材を使った「学生の教材研究」から「生き生きとした子どもの遊び」に発展させることを通じて、子どもの育ちを継続的に考えるための基盤を作ることになる。



写真3 学生の素材集めと整理

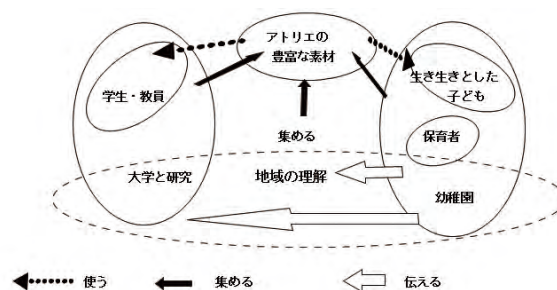


図4 素材活用プロジェクト

倫理的配慮：個人情報に記載されないように配慮しました。

7. 謝辞

本研究を進めるにあたり、素材集めに保護者の皆様、また素材研究や調査に短大・大学の学生の協力を得ました。また、園内研修に参加していただいた植草学園大学、短大の先生方、美浜幼稚園の先生

方、ありがとうございました。千葉市にあるまどか保育園の宇野直樹園長先生をはじめ先生方、園外研修等、多大なご協力ありがとうございました。最後になりましたが、園内研修、園外研修等で保育の研鑽に励んでくれている附属園保育者、職員の皆様、心よりお礼申しあげます。記してここに感謝いたします。

8. 引用・参考文献

- 1) 植草一世, 素材で遊ぶ—子どもの遊びを活性化させるための素材活用—, 芸術教育研究所 芸術教育の会, 芸術教育, 2016, Vol.95,39-41
- 2) 文部科学省, 幼稚園教育要領, 文部科学省告示第26号, 2008
- 3) 厚生労働省, 保育所保育指針, 厚生労働省告示141号, 2008
- 4) 森真理, レッジョ・エミリアからの贈り物—子どもが真ん中にある乳幼児保育—, フレーベル館, 2013
- 5) レッジョ・チルドレン, イタリア／レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録, 子ども達の100の言葉, 学習研究社, 2001
- 6) レッジョ・チルドレン, 子ども達の100の言葉 レッジョ・エミリア幼児教育実践記録, 日東書院本社 (蔵書改訂版), 2012
- 7) C・エドワーズ 子ども達の100の言葉 レッジョ・エミリアの幼児教育, 世織書房, 2001
- 8) 佐藤学, 驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育, ワタリウム美術館編, 2011
- 9) 植草一世, 大学附属幼稚園における保育の質を高めるための取り組み -子どもの遊びを活性化させるための素材活用 - 植草学園大学紀要, 2016, Vol.8, 39-49
- 10) 大豆生田啓友, 妹尾正教, 雲島絵美他, 子ども主体の共同的な学びが生まれる保育, 学研, 2014
- 11) 秋田喜代美, 子どもの挑戦的意欲を育てる保育環境・保育材のあり方, 公益財団法人日本教材文化研究財団, 2016

The Potential for a Children's Storehouse for Facilitating Play

- Kazuyo UEKUSA [1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University ,
Benten University-affiliated Certified Center for Early Childhood Education and Care,
Norio ANDO [2] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Ayaka BABA [3] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Nobuko TANI [4] Benten University-affiliated Certified Center for Early Childhood Education and Care,
Akemi SUZUKI [5] Benten University-affiliated Certified Center for Early Childhood Education and Care,
Mituho OGATA [6] Benten University-affiliated Certified Center for Early Childhood Education and Care,
Hitomi KURIHARA [7] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Yuki HIROSE [8] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

Based on the activities at Reggio Emilia in Italy where people in the town gather materials for their children, we made a storehouse of materials for the children in our kindergarten. In order to fix the direction of our future education of young children, we performed a questionnaire survey on teachers who had experienced building the storehouse, teachers who had not, and university students. The students thought that the storehouse would be easy and enjoyable for children to use. The unexperienced teachers expressed not only optimism at the prospect that it would increase the imagination of children, but also the anxiety about the usefulness of materials. The survey also revealed that the experienced teachers are convinced of the great possibilities of a storehouse for young children to facilitate their play and interact with each other.

As to the university students, they were impressed by the vigorous play of children and are eager to participate in the activity for enriching the contents of a storehouse in the University. We thought it is possible for us to build cooperation between the university-affiliated certified center and the university itself through creating and maintaining a storehouse for young children.

Keywords: A storehouse of materials, Reggio Emilia, University-affiliated Certified Center, a questionnaire survey, Helping young children play creatively,